美術の窓(39)

肖像画について

大和文華館館長　吉川逸治

今秋は特別展のテーマとして、肖像画を選び、成瀬不二雄次長が発案者としてこの特別展のために陳列する作品の選定にあたり、学芸部全員が参加して実現に努めております。

肖像という美術は人間像の美術の究極として、もっとも重要な部門で、しかも、私どもに親しい関係にある表現を中心として成立しているものです。西洋美術のなかでは、中世末からルネサンス、近代へと多数の大画家たちが肖像画の制作を残し、時代の美術の変遷、技巧の成熟を伝えるとともに、像主の社会、政治の情勢を反映させ、心理の情性から衣裳、調度、環境にいたるまで表出するので、私どもの注意力を広く、細かく要求します。

肖像はまず真実でなければならず、しかも、その表わすところは像主個人の心が中心であって、機微に入って捉えがたく、しかも、広く人間社会に生きて、年を重ねて成熟した人格のあらわれとして顔を描写し、身体と合致する衣裳まで写しだします。画家は、描写の技巧の熟慮はもちろん、像主の心理や状況を察知する感覚の鋭敏さと同時に心情の豊かさを備えた才能を要求されます。そして、なによりも真実であることが大切です。

迫真性は肖像画の基本的条件です。優れた肖像画は一瞬にして観者の心を捉え、凝視しつづけさせます。そして、観る者にも誠実さを要求します。画中の像主と親しく心の対話を交わすことになるわけです。したがって、当然優れた肖像画は個人像になります。

日本美術は傑出した人格に対して特別な尊敬を捧げる人々の性情から、奈良の古代以来このような肖像の彫刻や絵画が少なからず作られ、深い思念を捧げ、時には祈念を捧げて、殆ど神仏の像に次ぐ位階を与えて処遇してきました。高僧像の彫刻が数多く伝えられ、鑑真和尚の尊像の如く彩色も鮮やかに、強い感銘を与えます。彫像は、観者に視覚的な感銘のほかに、永続的な精神状態を生ぜしめる一種の観念的内容を悟らせます。これは、立体感の充実した肖像画にも共通した印象です。よく西洋の油彩画の肖像が、この点で倫理的内容とか情念的内容を豊かに盛っている形で現われているのを見られた経験がおありと存じます。

また、肖像は像主の精神表現に個性的な性格が現れなければならないのも当然で、先に挙げた高僧彫像など殆ど何れも、特徴的な性格が刻み出されています。

ところで、夢殿の名高い救世観音像は、非常に丁寧な制作で、御顔など真に迫る精気に満ち、凝視される御眼の開き、強い鼻翼のひろがり、いきいきした唇の血色、両腕の静かな動静とデリケートな指の仕草と菩薩像は塵世に顕現されたかと映じます。観相、祈念の観念界から現身の世に進み出でられるが如く、聖徳太子の御姿を写し刻んだと伝えるところは、げに誠かと感ぜられます。しかもこの菩薩像は、彫像としての量塊性を削り去って、精神の表現のために潔め純化した彫像で、まさに天界から降来される御姿です。飛鳥の芸術家がすでにこれほど個性の鋭い彫像を作っているとは驚嘆すべきことと存じます。

白鳳時代からは、唐朝美術を学んで立体性の備わった人体像によって、表情も豊かに運動も自由に描出する巧みな技術を駆使することになり、東寺の真言七祖像のなかに当時の肖像の趣が窺われます。

しかし、日本絵画の特性は、色面の平面構成とデリケートな描線の配置による大和絵の様式に肖像画の特色を発揮してゆくと思われます。平安末期から鎌倉時代には、他方では、中国の宋代文化の影響が次第に現れ、宮廷絵画の主流に新しい禅系統の頂相の芸術が加わって、肖像画にも新しい刺戟を加えてきます。この転換期に際して、著しい現象は神護寺の肖像画群の制作ではないでしょうか。また、高山寺の山中の材木の上に坐禅瞑想する明恵上人の図は、絵巻物の流れから発展してきた肖像的画想の制作で、肖像画特有の静座沈黙の姿を山中自然のうちに移し、宮廷的あるいは僧堂的格式の枠から解放しているところは、いかにも日本人好みです。後に雪村が冬空の下に雪の山丘を背に坐る自画像を描く型破りの画像を描くのも、この流れでしょうか。

自画像　雪村周継筆
大和文華館蔵

しかし、神護寺肖像画群の正統性は有名な源頼朝像に発揮されます。非常に寡黙な図像で、それだけ観者の視線を集中的にとらえ、凝視して、我を忘れ、画中の人物の顔貌から、冷徹不動の魂にまで引き込まれます。その眼差しは行末まで見通し、悟りきっているごとく、貴族的な細面に強い鼻筋を通し、結んだ口の厚い唇は並々ならぬ活力を蔵しています。強靭な精神力で緊張しきっているこの顔貌を強い黒綾を覆う黒衣の規則正しい平面がしっかり抑えて、全体の形をまとめています。二次元的、即ち平面的絵画が精神の統一的表現のためには、最も適切な表現ではないでしょうか。また、観賞者の側からも、視覚の純粋な享受のためには平面的絵画が最もよいのでしょうか。立体感や遠近感にわずらわされることなく視覚が条件の享受に没頭するためには。

季刊 美のたより No.95
平成3年5月16日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.